

論文要旨

論文題目：日本語における「自他」と「ヴォイス」の諸問題

執筆者：LD040015 村井聖徳

問題意識

本論文は、二つの問題を主眼としている。ひとつは、日本語の文法構造の中にある、「自他」と「ヴォイス」と呼ばれるカテゴリーが、日本語の実態に即していないのではないかという問題意識である。つまり、実際には「自動詞」「他動詞」といった「自他」の区別と、「受身」「使役」といった「ヴォイス」の区別とが統合された、より大きなシステムを、見かけ上、別々のものだと考えて記述してきたのではないかと疑い、その実態を精査して新たな概念の導入とカテゴリーわけをしようという試みである。もうひとつは、その検証を通して、日本語、あるいは人類の言語全体に普遍的な要素を抽出しようという試みである。

本文の構成と内容

以下、本論文の構成に沿って内容をまとめる。

第一章では、日本語の「自他」と「ヴォイス」に関する先行研究を調べ、日本語の文法記述に「自他」や「ヴォイス」といった概念がいつどのように導入され、どのように論じられ、いかなる問題点があったかを述べた。まず、近世国学者たちの論を概観し、近代については、時代と学説の節目となるべき研究者を数人とりあげ、かれらの見解と問題点を記述した。具体的には、大槻文彦、山田孝雄、松下大三郎、橋本進吉、時枝誠記、三上章を取り上げた。また、それら以外の研究者についても、重要と思われる見解についてはその内容に触れた。そして、その結果浮かび上がった問題点として、やはり長い間、日本語の「自他」と「ヴォイス」の分類については混乱が続き、どのように整理すべきか研究者ごとに大きく異なっているということがわかった。

第二章では、実際に、現代の日本語の「自他」と「ヴォイス」について、項と格という観点から、いわば統語論的な問題と助詞の問題について整理した。その結果、日本語では、格助詞が省略されうる項とされない項とに性質の違いがあり、格助詞が省略されうる項を中心に動詞の性質を分類することができることがわかった。そこで、「起動者」「帰着体」「第三者」という概念を作って、項の関係を調べてみると、「自動詞」と「他動詞」の項と格の関係は、「受身」と「使役」における項と格の関係と著しく類似しており、両者は同じシステムを共有していることがわかった。また、一般的には「自動詞」とされることの多い、移動や経路を表す「を」を伴う「行く」「走る」なども、「他動詞」と同じ構造を示した。一方で、動詞の形態変化については、格の決定と相関関係にあるようであるが、どこまでが一語なのか不明確なこともあって、整然とした法則がそのままでは見出せないことがわかった。そこで、それを新たな問題点として第三章で取り上げることにした。

第三章では、前章から生まれた問題点をもとに、「自他」と「ヴォイス」について、形態論的な考察を加えることにした。「補助動詞」の範囲を明らかにして、それ以外の語尾との区別をはかり、「受身」が項の格関係によって「直接受身」と「間接受身」に分けられることを示した。そして、無標の状態と、「直接受身」「間接受身」「使役」について比較をした結果、動詞の種類や語尾との組み合わせによっては成り立たないものもあることがわかった。特に、いわゆる「非対格動詞」は「間接受身」をこぼむ傾向にあった。また、「非能格動詞」の「使役」はそれ自体が「他動詞」であるかのような特徴を持ち、はっきりと区別しがたい場合があることが判明した。そのため、「非能格動詞」に限っては、通常できない「使役」の二重使用が可能とみなされるものがあった。それらの制限を除けば、「受身」や「使役」は、生産的に作ることが出来るのに対して、「自動詞」と「他動詞」の形態上の対応は、調べてみると整然としておらず、何らかの別のパラメータの存在を匂わせる対応規則が見つかるだけであった。従って、形態論的には「自動詞」と「他動詞」は対応規則を持たず、その原因は通時的なものにあると判断して、第六章での課題とした。

第四章では、前章までに扱わなかったが「ヴォイス」に付随する問題として、「受身」「自発」「尊敬」「可能」という四つの機能が、実際に同じ形態に同じように使用されているかどうかを調べた。その結果、「自発」については文語とは異なり、口語では「受身」の中の小分類として考えたほうが適切であることがわかった。また、「尊敬」としての用法は近年その使用が狭まっていることを確認した。「可能」については「受身」との乖離が進み、「受身」と「可能」それぞれが別々の形態となるように変遷していることがわかった。特にサ変動詞ではその差が著しいことを指摘した。それ以外の動詞でも、「可能動詞」や、いわゆる「ら抜き」の登場によって、「受身」と「可能」の差別化が進んでおり、これは「直接受身」の使用頻度が近代において高まったことと因果関係があるものと思われる。

第五章では、語形成における「自他」と「ヴォイス」の問題として、「ゆでたまご」という語の形式に見られる問題を扱った。これは、「ゆでたまご」のような造語において、「たまご」が「ゆでられて」いるにもかかわらず、英語の "a boiled egg" のような形式と異なり、「ゆでたまご」という語の中に受動関係を示す要素が入っていない理由についての問題と、「たまご」が「ゆでられて」いるにもかかわらず、語順が「ゆでたまご」のように「動詞」＋「名詞」の語順になっている理由についての考察である。ここでは、語形成が発話と同じプロセスに沿って行われると考えた場合、「受身」を表す要素は、独立した動詞に近い性質を持っているがために、造語のプロセスよりも手順がひとつ後で想起されるため、造語の際には「受身」の要素を示す語句が想起されない、という解釈をした。また、「受身」は意味の上では「その物体の意思に反して何かをされる」という面が強くあると考え、造語の際に、「たまご」のような無情物に動作を処理するような場合では、その「たまご」のもつ無情性ゆえに、「受身」を示す要素が示されないまま語形成される、との考えを示した。これは、意思を持つ有情物を構成要素として語形成した場合の「立たされ坊主」「嫌われ者」などの場合には「受身」を示す要素を表示して語形成を行うことから解釈したものである。語順の問題については、「たまご焼き」の例が特殊な場合であって、通常は「ゆでたまご」のように名詞が後半に来るものであることを示した。

第六章では「自他」と「ヴォイス」の形態的特徴が通時的要因によるものであるという考えに基いて、「自他」の形態差のうち、特に五段活用と下一段活用の対立になっているもの

についての通時的な発生要因を考察した。何段活用、何形、といった記述的な文法カテゴリーを、口語の話者が普段からは意識していないように、文語の話者にもなかったと考え、活用が未発達な時代の話者にはよりいっそう、派生語が派生前の渾然一体の状態を意識されていたと考え、これに上代以前の母音体系とその結合法則、動詞の活用、名詞の母音交替などを加味して考察した結果、四段動詞からアスペクト的な意味対応を持った下二段動詞が派生して、それが現代の「自他」対応として残ったという結論に至った。また、上代以前の母音体系を考察した結果、「起きる」の「他動詞」が「起こす」、「尽きる」の「他動詞」が「尽くす」、「生きる」の「他動詞」は「生かす」のように、現代では上一段の「自動詞」について、現代で対応する「他動詞」の「す」の前の母音が一定でない現象についてもその理由が判明した。

第七章では、「自他」と「ヴォイス」を統合する概念とは何なのかを考察した。現代の日本語における「自他」と「ヴォイス」は形式上の差異からふたつのカテゴリーに分かれているだけで、実際は発話したい現象に参加する項目の数と、現象の内部での「焦点」に対応して形式を切り替えているに過ぎないと結論付けた。また、そのために必要な時間と空間の認識が、人間が言語能力を生得的に所持させているという見解を示した。

ページ数と文字数

本論文は、表紙から参考文献一覧までを含めて、A4 用紙 161 ページで構成されている。本文の文字は 10.5 ポイントの活字を使用している。

スペースを含めない文字数は、序論から結論までで 15 万 5388 文字で、これは 400 字詰め原稿用紙で 389 枚に相当する。これに表紙、目次、参考文献一覧、および本文中に画像として挿入した一部の図表で構成されている。